

米山梅吉記念館 館報

2008
(平成20年)

秋

Vol. 12



16歳で故郷長泉を飛び出し東京に出た梅吉は、米山家の支援を受けず、自力で職を得て学びながらお金を貯めた。当時、100円あれば留学できると言われていたが、スクールボーイとして働きながら、アメリカ各地の大学で勉強を続けるには、並々ならぬ気力と体力が必要であったであろう。その後の、勉学に勤しむ学生への援助は、この苦学経験から生まれたといえる。

東京RCが米山の遺志を継いで米山基金が生まれ、米山記念奨学会となる。奨学会は財団創立から41年、現在、この奨学金で学んだ学友は1万4千人にのぼる。学習意欲に燃える若者を支えるこの制度は、単に財政的な支援に止まらず、関わったすべての人と人の心を結んでいる。

この奨学会の同窓会である米山学友会は、日本国内はもちろんのこと、台湾と韓国にもある。台湾には1983年、海外初の米山学友会、社団法人中華民國扶輪米山会が発足。台湾での社会的奉仕や、台日交流の援軍として積極的な活動を展開している。

米山の名の下に学んだ人の輪は、今日もどこかで輝く笑顔となっている。



財団法人 米山梅吉記念館

理事長に就任して



理事長 渡邊 脩助

梅雨が明けた途端、猛暑の連続ですが、記念館からの夏の富士山は雄大です。

全国のロータリアンの皆様、米山梅吉記念館です。年間の変わらぬご支援ありがとうございます。宮城・岩手内陸地域の第2620地区の皆様には心より御礼を申し上げます。

私は4月の記念館、春の例祭時の理事会で第5代理事長に推挙されました。地元三島RCの渡邊脩助です。ロータリー創立100周年(2004～05)の当地区のガバナーを務めました。記念館の近くで開業しております整形外科医です。

理事長就任は私にとりまして、身に余る光栄と感謝申し上げるとともに、その責任の重さを痛感しております。

去る、2月7日、内藤前理事長が突然ご逝去されました。87歳という高齢でありましたが、昨年11月の地区大会ではお元気なお姿を拝見しましたので、まだまだと思っておりましたが、誠に残念でした。謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

内藤前理事長は、平成10年の新館建設時の建設委員長を務められ、その後、記念館理事長として10年間、新館の健全な運営と新しい事業の展開により、全国的な組織に拡大し、全国から多くのロータリアンに御来館して頂けるようになりました。2002年11月には、ピチャイ・ラタクルR1会長の公式訪問を頂き、ロータリー勲章掲示が認められるようになり、R1から多地区合同奉仕活動のひとつとして認められました。また、35周年記念事業として、「超我の人、米山梅吉の霊言」という素晴らしい記念誌を発刊されるという、数々の素晴らしい業績を成し遂げられました。

私は就任をお引受けした以上、我が国ロータリーの創設者である米山梅吉翁の遺徳を仰ぎ、その偉業を後々まで顕彰し、ロータリー関係資料を保管整備し、ロータリー精神の普及を行い、広く社会に貢献するという目的をもった記念館の意思の確かな実現と、円滑な運営のために、非力ではありますが、

努力する覚悟であります。

米山記念館は春・秋の例祭を恒例としております。春は米山翁の忌祭、秋は館創立記念祭です。今年の秋は長谷川 了兼塾学園理事長(浜松北RC)による「三井報恩会(新代理事長米山梅吉)の結核撲滅と救済援助」と題してのご講演を頂く予定であります。

予てよりの都市道路計画による、道路整備が行われ、米山家として唯一残っておりました「長屋門」は解体されました。道路計画が完成すれば記念館への道順もわかり易くなることと思います。

7月10日には台湾校友会が、6年ぶりに米山梅吉翁の墓参りに記念館を訪問されました。阮允恭理事長や許国文バスターガバナーをはじめ、学友16人とその家族、合わせて22人が来館されました。米山記念奨学会板橋理事長も御同行され、翁の墓前に立って合掌し、米山記念奨学会への感謝の意を表されました。

さて、記念館の運営は厳しい状況になって来ております。

米山記念館は第2620地区で独立財団法人として、地区からの支援をうけておりますが、日本全国のロータリアンのものでもありと思っております。そのような思いから、全国の100円奉金運動、賛助会制度はじめ地区資金、神奈川2地区、米山記念奨学会等からのご援助を受けて運営しております。最近の会員の減少にも拘わらず、記念館への来館ロータリアンは増加しておりますが、何故かスマイルが減少しております。ロータリアンの懐が寂しいのか、奉仕の心、思いやりの心の欠如か、それとも記念館の全国ロータリアンへの情報発信に問題があるのか、大いに反省・検討されなければなりません。

私たちが日本ロータリアンのメッカとして、「米山館」で、をして頂けるような記念館になるよう、内容の充実、米山イズムとロータリー精神の高揚を図り、日本全国からのロータリアンと米山奨学生のご来館を心からお待ちしております。



■日時 2008年4月29日(火)
■会場 新米山梅吉記念館 ホール

- 例祭及び墓参
- 挨拶
新米山梅吉記念館
理事長 渡邊 脩助
第2620地区
ガバナー 道部 兼氏
- 記念講演
演題「米山記念奨学会事業の現状と将来」
講師 副ロータリー米山記念奨学会
理事長 板橋 敏雄氏
アトラクション ピアノ演奏
鈴木 未桜さん
- 懇親会

春季例祭



渡邊理事長

乾杯 松永博典氏(山口RC)

記念講演

米山記念奨学会事業の現状と将来

板橋 敏雄

私は昨年8月、前任の島津理事長が任期を終えられて、その後任に就任いたしました。全く思いもよらないことでしたが、振り返ってみますと私の人生は池れ類に当たりやすいようです。本人はそんなことを考えずにきたわけですが、私は30歳の時に足利東RCのチャーターメンバーになりました。そもそも私の親父がロータリアンにならないかと誘われ、親父はあま

り外交的なタイプではなかったので、ちょうど東京から修行を終えて息子が帰って来たからと、私の名前を書いて知人のロータリアンに渡した、というのが私のロータリアンの始まりです。入ってすぐは両も束もわからない、そんな状態でした。ロータリーに入って3年目だったと思います。地区大会が新潟であり、白髪の高貴な感じの方が赤いたすきをかけて「よくいらっ

しゃいました。と32,3歳の私を握手で迎えてくださいました。中に入ってプログラムを見るとその方は銀行の頭取さんでした。私は当時お金を借りるのにその取引先の支店長の前で気をつけをして「お願います」と言っていたのに、頭取が手をさしのべて「いらっしゃい」と言っていただけ。ロータリーとはなんと横糸の世界、我々は毎日縦糸社会で苦勞していましたので、ロータリーのすばらしさを実感しました。

55歳のとき、10月1日にバストガバナーから呼ばれました。「君にガバナーをやってもらうことに決まった」と。そのころは茨城と栃木が同じ地区で交互にガバナーをやっていて、3年先のガバナーノミネーに今まで決まっていた方が健康上の理由でおりられる、おまえしかいないと言われたわけです。これも逸れ弾です。しかし私の性格から当たった以上は一生涯やらうと思いました。1985年にポリオが始まり、私が1987-8年チャールズ・ケラー会長のもとでやりました。私はポリオガバナーと言われるくらい一生涯やりました。その後、SAAで国際大会や国際協議会などを経て、2001-03年までR1理事を務めました。

ロータリーは非常に多様性の世界です。職業的にも、色々な人柄がいるという多様性の中で、自分を磨くことがロータリーの大きな魅力だと思いました。私が仕えたR1の会長は2001-02年のリチャード・キングさんというアメリカの方で、この方の考え方はリーダーとは天空をイーグルのように舞って下界を見下ろして指導する、というものでした。続いてタイの副首相をされたビチャイ・ラタクルさん。王に両膝着きました。ラタクルさんは「リーダーとはパレードの先頭に立ってバトンやフラッグを振る。時には半圓いが半の群れの周りを歩くように、群れの中に入って群れながらフラッグを振る人たちと心を合わせてひっぱって行くのが本当のリーダーだ」と。天空を舞わずに一人で舞うイーグルと半圓い、これほど多様なことはないのではないかと思います。私はラタクルさんにいるんな意味で大きな影響を受け勉強させていただきました。以前こちらにお邪魔いたしましたのもラタクルさんのお供をして参ったわけです。そのときラタクルさんは講談や、梅吉翁の献参などをしました。ソムチャードさんという第1回の米山奨学生はタイ国の方で、絹の研究を東京大学でされ、帰国してからタイシルクの生産に貢献されました。2階の展示室に飾ってあるその方の写真の前で非常に感慨深そうにご覧になっていました。また梅吉翁を心から尊敬されておられるのがわかりました。ラタクルさんが一番勉強されていたのは、この制度がアジアの学生を中心に奨学金を贈り、しかも各人に英語

クラブがありカウンセラーが学生と対面をして日本人の心を伝えていく、すばらしい奨学事業だとおっしゃっていました。

東京クラブでスタートいたしました奨学金制度も最初からアジアを対象に行われてきました。現在もその傾向を引き継いでいます。

梅吉翁の遺徳を御んで作られた奨学会は、昨年財団設立40周年を迎えました。米山奨学会の状況につきましては、日本で民間の奨学団体としては他の遺徳を許さないNo.1でございます。基本財産50億円、特別積立金が現在27億円、殆ど国債によって運用され、最も安全な形で奨学会の財産として残っております。その他毎年各地区各クラブから総計14億5000万円という多額の寄付を前歳して800人の学生に使われる、という運営がされているわけです。韓国でも、このような奨学事業モデルを起こそうという考えをもっているところもあるようです。皆さんのご寄付によって、毎年1000人の奨学生を受入れていましたが、ロータリアンの数が10万人を割り、特別積立金を取り崩していくのはどうかというご意見もあり、現在800人になっています。奨学会に課せられた一つの目的は、奨学会の趣旨を皆さんにご理解いただいて、寄付が増して行くことを考えなければならない、理事長としてその責任を強く感じているところであります。地方と都心の格差とか、大企業と中小企業の格差とか言われておりますが、全国34地区の普通寄付金は、優秀な地区とそうでない地区との間では、かなりの差がございます。これは、経済格差ではないと思います。むしろ米山の奨学会のすばらしさを知らない、関心を示していない、「知識の格差」がこういう事を起しているのではないかと思うのです。ですから私は理事長として各委員会にもお願いをして出来るだけ知識の格差がないように、皆さんが支える財団であるということにもって行くことを私の役割と考えています。

「人をつくり、世界に尽くす米山」という言葉があります。これについては米山学友の哲さんが、いかにアジアで活躍をされているかをご紹介してみたいと思います。

昨年12月7-8日、台湾の米山学友会総会に参加してまいりました。140~20人の学友の方々が台北に集まり、活気のある会でした。私が最も感動したのは、学友として台湾に帰ってそんなに時間の経っていない若い学友の方が、私と名刺交換するときに「私は何限のどこの大学で学び、どのクラブでお世話になりました」とと大学と世話クラブの名前を並行して誇りをもって言っていました。これこそ他の奨学金にはないものだと思

います。翌日、台湾の故宮博物院で米山学友の林麗麗さんという御院長と流暢な日本語で約1時間話談させていただきました。ちょうど1981-3年東京大学の大学院に米山奨学生として学ばれ、1996年には東京芸術大学に学ばれました。世話クラブは東京製器RCでした。そのとき林さんにいわれたのですが「日本人は美しい、いいことをやってもやったやったというな、いいことは自然とわかるよ、という考え方をよく勉強してきましたが、時代も変わってきています。やった以上のことと示してはいけないけれども、いいことをしたらそれをPRして広めることも考えるべきではないか」と言われ、私ははっと思ったわけです。このような学友に各地を訪問していただいて、できるだけ機会をつくって情報の流通、感動の流通をなくしていくことに努めたいと思います。

戦後もなく日本の復興期において、アメリカのフルブライト資金で、日本の学生をアメリカで迎え入れ勉強をさせた。その人達は帰ってから経済界などで力を発揮された。米山の奨学生が本当に日本人の気持ちを理解して、日本とそれぞれの国との平和を考えていくのに大きな力を貸していただけるのではなからうかと思えます。もう一つ『和解のために』という著書で大橋次郎論壇賞を受賞された韓国の学友がおられます。この受賞によせて次のように書いておられます。

「教科書、慰安婦、韓国、竹島など経済文化交流が進んでもなお難しい日韓関係を根本から見直し、これらの問題を巡る両国の認識のズレを狭めようと試みた。日本に対する韓国の根深い不信は、戦後日本の変化が韓国にあまり知られていない故のことと私は考えた。このような確信は日本に留学していた大学時代からのものである。修士2年のとき米山奨学生として浦和北RCで1年間お世話いただきましたが、あのときのロータリアンの方々との出会いもこのような人材を育む基盤のひとつになったと思います。例會で皆集って話す機会を得て日本のある良質な部分を見ることができたのは、今思えば貴重な機会でした。」また授賞式には当時のカウンセラーもご招待し、受賞スピーチで「私は日本を信頼していきたくて申しましたが、このように言えるようにして下さった皆様に感謝の言葉を直に聞いて頂きたかったからです」と述べています。私たちは世話クラブとして愛情をもって米山奨学生に接している人は、間違いない彼らの心の中に今読み上げたような印象を与えているということ、これを多くの人に知ってもらいたい、こうして感動の格差をなくしていくこと、それが私たちの役割ではないかと思えます。

もう一つ、学友が日本の恩を忘れずに恩返しをしよ

うと思っている例があります。これは学友からの寄付金であります。東京都280地区黄竹藤さんという台湾の方からは、すでに120万円のご寄付をいただいています。それから横浜鶴崎クラブのホストで韓国の田崎順さんという方は、たばこを吸っておられたのですが、昔、寄付を集めるため「月にタバコ1箱を節約して」を合言葉にしていたという話を伝え聞いて、たばこを止めた金額毎月1万円をご寄付いただき現在31万円になっています。ベトナムから東京大森RCのホストで来た方からは100万円のご寄付をいただいています。世話クラブ東京臨海RCで、日本の大学院、その後米國で学び弁護士資格を取り北京で開業されている鄭軍さんは、日本になんとかお返しをしたいということで、毎年50万円ずつ今後ずっと寄付を続けていきます、というお話をいただいています。50万は途合できる日本へ送金できるマキシマムの金額です。このように我々がお世話した大勢の方々が、心にとめていただいて、具体的にお礼をしたいと考えていらっしゃることは、なんとも我々にとってやりがいのある仕事ではなからうかと思えます。

最後に、私が日頃座右の銘にしております言葉を申し上げます。「夢をかたみに」という、富士通の山本真真さんからいただいた言葉です。そのご本を20数年前頂戴し、その後これを私の座右の銘にしておりましたところ、来年の韓国から出る李東健R1会長が「Make Dreams Real」この日本語訳が「夢をかたみに」です。李さんは2年間私と一緒に理事をやり、ゴルフをやったりと親しい関係です。夢をかたみにしていくのは簡単にできることではありません。思いますに、まず我々は良質の夢をみなければならぬ。物事の神髄を知るために小説を読むこと、映画を見ることも大事です。自分の中にいい夢を持ってこれを実現するためには、不撓不屈の負けじ魂がないとダメなんです。Give upしない、その目標をたぐり寄せるまでは一生涯やる。もう一つ大事なことは、物事を数値化してみることでいいと思います。目標法人ロータリー米山記念奨学会理事長という私に分の過ぎた大きな重責も、一つひとつの夢をできるだけ数値化することによって叶えることができると思います。坂下事務局以下、事務局と一緒に色んな計画を立て、米山を支えていただいている全国の地区の方々に伝えていきたいと思えます。米山梅吉翁の心が、一人ひとりの学生に伝わるような、間違いない奨学事業を展開していくことが、日本のロータリーを世界に冠たるロータリーとする最も大事な道ではないかと思えます。皆様方の心からのご支援、ご協力を申し上げ、私の話を終わらせていただきます。

台湾学友 16 人が米山梅吉翁の墓参に来日

(財)ロータリー米山記念奨学会 事務局

台湾の米山学友会（正式名称：(社) 中華民國扶輪米山会）が、6年ぶりに米山梅吉翁の墓参ツアーを企画。学友16人とその家族、合わせて22人が来日して、7月10日（木）、米山梅吉記念館を訪れました。

今回の参加メンバーには、学友会の現理事長（第4代）の阮允恭さん（1971-74年／神戸RC）、第2代理事長の許邦福さん（1970-73年／京都東山RC）、第3代理事長の陳思乾さん（1973-75年／大阪淀川RC）、台湾の米山学友で初めてガバナーとなった許国文PDG（1975-77年／徳島RC）、常務理事の林維家さん（1987-88年／岡山南RC）、幹事長の王秉棟さん（1987-89年／桐生南RC）など、台湾学友会の主要メンバーのほか、台湾の刑務所改革を成し遂げた呉惠璋（1986-87年／東京原宿RC）さん、村上春樹の翻訳家として著名な頼明珠さん（1977-78年／松戸RC）、米山学友を中心に台中文心ロータリークラブを立ち上げ初代会長となった郭錦堂さん（1984-86年／相模原中RC）など、台湾の各界で活躍する学友が揃いました。【（ ）内は奨学年度と世話クラブ】

到着した一行を、(財)米山梅吉記念館の渡邊



館助理事長、井口賢明常務理事、木内昭夫事務局長、第2590地区（神奈川県）米山奨学委員長の鈴木憲治さんが温かく出迎えてくれました。一行が最初に向かったのは、今回の旅行の目的でもある米山梅吉翁の墓所でした。墓前に台湾から携えたたくさんのお土産を供えると、一同は声を合わせて「ありがとうございます」と何度もお礼を述べ、深々と合掌しました。中には涙ぐむ学友もいて、留学中の最も苦しい時期を支援してくれた米山記念奨学会と、この事業の精神的な源となった米山梅吉翁に対する深い感謝を今なお持ち続けていることが伝わってきました。そのような学友を代表して、前々理事長の許邦福さんが「6年前にお参りしたときは雨が降っていて、米山先生がうれし涙を流しておられるのかと話していた。今日は曇り空だが、きっと私たちの訪問を喜んでくださっていると思います」と、墓前で思いを語りました。

その後は、記念館の展示室を見学。学芸員の市川さんのユーモアあふれる説明に、時折笑いも混じって、終始和やかに鑑賞して回りました。途中、市川さんの許らいで、学友たちが輪になり、手をつなぐ場面も。「あ



なたの右手をあげてみてください。手をつないでいると、自然と両方の手が上がります。自分の右手は誰かの左手とつながっている。いつもそのことを忘れないでください」との説明に、学友たちから感嘆の声が上がり、ひときわ盛り上がりました。

ホールでは、ロータリー米山記念奨学会の板橋敏雄理事長から歓迎のあいさつがあり、最近の米山記念奨学会のニュースが報告されました。また、学友会を代表して、阮理事長があいさつに立ち、「今日はとても暑い日でしたが、墓前でみんなが流していたのは汗だけではなく、涙だと思います。私たちは今も感謝の気持ちでいっぱいです」と述べました。

その席上、岩手・宮城内陸地震へのお見舞いとして、台湾学友会からの義援金25万円が板橋敏雄理事長に託されました。また、記念館には、今回の温かなもてなしへの謝意を込めて、10万円が寄付されました。

「私は4回目の訪問ですが、何度来ても同じ



板橋理事長に義援金を託す阮台湾学友会理事長 気持ちで胸がいっぱいになります。ここに来るたび、米山記念奨学生となってから出会ったたくさんの方との思い出が走馬灯のようによみがえります。ここは言わば、われわれ学友にとっての聖地。すべての米山学友に訪れてもらいたい場所です。私たちも、また必ずここに来ます」と語った阮理事長。半日の訪問を終えて、笑顔で記念館を後にした一行は、中部地方を周遊して、13日の午後、無事に台湾に帰国しました。

台湾米山学友会を代表してご挨拶

中華民國扶輪米山会
理事長 阮 允恭



私たちは皆、米山記念奨学会のおかげで、留学生生活をスムーズに送ることができ、本当に感謝しております。それだけでなく、日本全国のロータリアン、(財)ロータリー米山

記念奨学会の皆さまのおかげで、われら米山OBが帰国後、米山の旗のもとに互いに知り合い、共に行動することができるようになりました。それが、今日の中興扶輪米山会の源となっています。

「飲水思源（水を飲むときにその水源を偲ぶ—他人から受けた恩を忘れてはいけない、という意味の中国のことわざ）を合い言葉として、台

湾に帰った後も感謝の気持ちを忘れず、米山精神を持って頑張っていこうと学友が集まっています。その感謝の気持ちは、泉のように心の中から尽きずに湧いてきて、今回もこのように大勢で米山梅吉翁のお墓参りをする事ができました。私にとってはこれが4回目のお墓参りであり、6年ぶりとなります。前回こちらに参りましたのは2002年12月4日でした。米山OBなら誰もが来たかったと思いますが、いろいろな都合によって参加できない人もいました。元理事長の黄仁安氏も仕事のために参加できませんでしたし、徐重仁氏も、経営する台湾セブンイレブンの30周年記念式典のために来る事ができませんでした。しかし、皆、米山梅吉翁への感謝の気持ちは同じだと思います。われわれは、彼らを含めて米山OBの代表として、今日のお参りに臨みました。

梅吉翁の墓前に立ち、お花とお線香をあげた後に、皆で大きな声で「ありがとうございます」とお礼を申し上げました。今日はとても暑

い日でしたが、墓前で皆が流していたのは、汗だけではなかったと思います。年齢に関係なく、私と同様にOBたちが涙をぼろぼろと流している姿を見て、やはりみんな米山の子どもたちだと思いました。

こちらには何回来ても、興奮、感涙の気持ちで胸がいっぱいになります。何度来ても新鮮な発見があります。記念館の展示室を見学し、貴重な資料や文庫を拝見しました。米山梅吉翁の一生の偉大さとその心の広さに感じ入りました。また、それとともに、これまで記念館のために多くのロータリアンが長年にわたり尽力されたことを、身をもって感じました。涙が下がるのみです。なお、市川様の丁寧な説明は、本当に“錦心譚口”そのもので、感心しました。

将来、また機会があれば、このわれらの聖地に再び参りたいと思います。また、われわれのために、坂橋理事長をはじめ、多くの皆さまがわざわざお越し頂き、大変感謝しております。今日はいろいろとお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

梅吉翁の精神に感動

米山学友 呉 憲璋



今回、記念館をはじめ訪問しました。一番心に残っているのは、やはり米山梅吉翁の精神です。墓前では、口では言い表せないほど、感謝の気持ちがあふれ

てきて、胸がいっぱいになりました。梅吉翁の奉仕の精神で、世界は一つになると強く感じました。翁の精神を受け継いだ者として、私は、現在の職務である受刑者の社会復帰のために、全身全霊をかけて頑張りたいと思います。記念館の皆さまには、詳細な解説をいただくなど、大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

感謝と報恩の思いあらたに

米山学友 林 維宏
(台北民生RC)



長年の願いが叶い、今回はじめて記念館を訪問することができて感無量です。米山梅吉翁の墓前では、あらためて「感謝と報恩」の気持ちがこみ上げてきました。今回の訪問で、

留学していた時にお世話になったことへの恩返しをしたい、そして日台親善・交流の懸け橋になりたいとの思いが一層強くなりました。その一環として、私たちは現在、台湾に留学する日本人学生への奨学金支援の立ち上げに取り組んでおります。これを早期に実現することが私たちの目標です。

ロータリーファミリーを感じた記念館での思い出

米山学友 王 秉棟



初めての記念館訪問で、最も心に残っているのは、2階を見学したときのことです。学芸員の市川さんから、みんなで輪になって手をつなぐように言われ、ロータリーソングを歌

いながら、言われるままに全員が右手を挙げました。結果、両手とも挙がりました。ロータリーの奉仕の精神で、全員の心をつなぐ、みんなロータリーファミリーの一員なのだ実感しました。

梅吉翁の墓前に誓ったように、いつも感謝の気持ちを持って、ロータリーの奉仕の精神を実行できるように頑張っていきたいと思っています。そして、できれば、これから3年くらいごとに記念館に墓参に行きたいと思っています。

ポール・ハリスと月桂樹

足柄ロータリークラブ

昭和10(1935)年、ポール・ハリスが来日の記念に植樹した月桂樹は、帝国ホテル取り壊しのため、移植を余儀なくされた。すでに樹勢が衰えていたが、なんとか保存したい、と相談を受けたのが第一生命の矢野一郎だった。

矢野一郎は、第一生命保険相互会社を創立した矢野恒太郎の長男で、明治32年に生まれている。昭和22年から23年間にわたり同社の社長・会長を務め、この間生命保険協会会長を2期8年務めるなど、文字通り戦後における我が国の生命保険事業発展の基礎を築いた人である。



一郎は、ロータリークラブへの情懷も深く、今日、全国のロータリアンに愛唱されている「手に手つないで」を昭和27年7月に、「それでこそロータリー」を昭和37年1月に自ら作詞作

矢野一郎 氏(東京RC) 曲し、昭和35年7月1日には、東京ロータリークラブ第41代会長に就いた。帝国ホテル旧館の解体が始まったのは昭和42年である。当時、一郎が帝国ホテルの社外重役も兼ねていたのと、昭和43年の竣工を目指していた大井町の第一生命本社ビル建設と時期が重なり、温暖肥沃な神奈川県大井町の台地に移植されることになった。

この樹の高さは2倍くらい、直径は7~8センチくらいであった。広大な敷地内に適地を選別し、富士見通りメガネ道上部付近に移植し、あらゆる手当を試みたが、この樹は結局発芽しないまま枯死してしまった。移植の際には、万一に備えて大学や業者へ依頼し、100本以上の挿し木も試みている。時期も苗も悪かったので殆どが枯れてしまったが、一郎は東京帝国大学の農学部を出ており、この辺の着眼も持っていたので



第一生命本社に植えられた月桂樹

あろう。色々関係者に指示し、遂に7本の活着に成功した。植樹二世誕生までの経過について、一郎の次のような記述がある。「昭和42年(帝国ホテル)本館取り壊しの際、中庭の木はすべて放棄されたが、この木だけは助けたいと第一生命本社に移植し、手を尽くして努力したが、すでに病害虫で銀死寸前のひどい状態であった。しかし、移植と同時に枝葉を切って挿木した100本のうち8本(実際には7本)だけが活着した。これは第一生命の元社員で国際的に有名な野草研究家の小沢元之助君が、米産産の発根促進薬をいろいろな濃度にして苦心した結果奇跡的に根をつけたものである。」

親木の方は枯死したが、一郎はこれも無駄にしていない。その根の部分で点線用の植を2本作り、1本は米国のシカゴロータリークラブ本部に、あとの1本は東京ロータリークラブに寄贈している。さらにその枯木から相当数のペーパーナイフを作らせ、ロータリークラブの会員など各方面に寄贈した。この時の舌代の文面に次のようにだりがある。「さてその枯れた木ですが、これを使って何か記念になるものを作りたいと考え、家具屋に命じて測りさせるところ、満身虫の穴だらけで、到底銀死を免れることはできなかったことが判明しましたが、その根の部分で植を作って、東京ロータリークラブに贈って保存して貰うこととしました。尚、その際その木からペーパーナイフを作らせたので、ハリスが植えた木の記念として1本贈呈します。一応乱暴な手作りで塗料を塗っただけのもので、また虫の穴も沢山ありますが、却って素朴で植



観木から作られたペーパーナイフ

があるかもしれませんが、更に丁寧に削り直して、漆でもかければ丈夫なものになります。」

職員が、矢野一郎の指示にしたがって実際に二世を育成したのは、第一生命の子会社の第一生命総合サービス株式会社(旧第一生命相互林業株式会社で、大井本社本館ならびに台地18万坪の管理会社)である。ここで7本の活着に成功し、そのうち4本は要請によって各地のロータリアンゆかりの場所に移植されている。

平成11年1月現在、昭和42年に活着した二世の6本の所在は次のとおりで、それぞれ立派に成長している。

- ※ 第一生命大井本社台地上芝庭(神奈川県足尾上郡大井町)
- ※ 第一生命大井本社藤棚の下(神奈川県足尾上郡大井町)
- ※ 帝國ホテル正面玄関左脇(東京都千代田区)
- ※ 北の丸公園(東京都千代田区)
- ※ 米山梅吉記念館(静岡県駿東郡長泉町)

『ロータリアンの創設者 ポール・ハリス』を再読して



米日双方のロータリアンの創始者、ポール・ハリスと米山梅吉。あらためて米山梅吉翁の年譜を見ても、ポールと同じような生涯を過ごしたことがわかる。

ポールは1868年4月19日生れ、米山翁1868年2月4日生れ、共に78歳の生涯を終わっている。そして、二人とも苦学し乍ら他の国々を見て見聞

※ 二宮尊徳記念館前庭(神奈川県小田原市)
第一生命総合サービス株式会社では、昭和50年以降その孫にあたる三世の挿し木を試み、育成中である。木の高さはそれぞれ1.5くらいに成長している。これは、二世の育成を成功させた矢野一郎の意思に添うものである。

『ロータリアンの友』平成7年4月号、愛知県(第2760地区)の地区たよりに、米山記念館の二世月桂樹から枝分けした三世月桂樹のことが記載されている。「一宮ロータリークラブ創立安野謙次初代会長が、これを枝分けして自宅の庭に丹精していたが、創立35周年を記念して、当クラブにご寄付いただいた。小さな瓶に入っていた小枝を社殿前庭に定植。今日では3にあまりに成長し、この常緑樹は葉をいっぱい広げている。ポール・ハリスの遺徳を偲びつつ、ロータリアンの理想と友愛が広がることを念願として一宮ロータリークラブの象徴となっている。」

主題の樹は、ロータリアンの間で、時として話題に上がることもあるし、また挿し木によって増殖が可能であり、今後各地の記念樹から三世、四世と枝分けされて拡繁されていくことであろう。その際この樹の由来が広く、かつ正しく伝承されることも、またロータリアンにとって意義深いことである。

この文章は足利RC発行の『ポール・ハリスと月桂樹』からの抜粋です。

箕島 清夫

(小田原RC)

を広めている。米山翁は20歳から渡米して8年間の米國滞在での努力が実り、三井銀行に入社し、経済界の第一人者となった。ポールはヨーロッパ諸国を訪問して見聞と友情を広めた。

この二人の友情は一番の本によって深くなり、1935年、ポールが来日し、両者が初めて会った時にはこの本で相通する信頼感と友情に喜び合うことができた。その本は『ロータリアンの創設者ポール・ハリス』である。この原著がシカゴ

で出版され、世界四十余国のクラブ間に送られ、米山個人にも贈与された。当時、日本は第70ディストリクト。日本にロータリークラブが出来て9年目であり、7つのクラブがあった。1929年10月には太平洋ロータリー大会が東京で開催され、北米、カナダ、ハワイ、オーストラリア、フィリピン、シナなどからロータリアンはもちろん、その家族まで500人以上が集まった。そんな時期にこの本は出版された。

「此書の翻訳に就いて」と題した米山翁の文章がある。ここで、米山翁は書中最も感が深くする点を三つ挙げている。第一は、ポールの態度が如何にも敬虔でロータリーのような大運動を起こした人の其れに似合わぬ謙遜さがらであること。第二に、彼は頗る文学的天分に富んでいることが記述の間に表れ、見事に全編の文を進めていること。第三に、彼は眞に躬行実践の人で艱難辛苦をなめてきたその生涯から得た、厚い人情味から一貫して友交の重きを知らしめた。ロータリアンの精神がそこから出発して「己が他より崇まれんと希う如く他に施せ」という古き真理が新しき輝きをもってこの人生を有意義のものとするに与って力がある、という点である。この本を読んで、いかに米山翁がポールから学んだかがわかってきたような感じがする。例えばこの文中に、ポールの行き先がどこであろうとも可能だったのは、彼が、常に服装を整えて身辺に能く注意の行き届いた所を示していたからであった。米山翁も常に服装はきちんとしておられた。また、彼は仕事を遊ぶのに階級に束縛されなかった。そして、自分自身の内に備える最善のものを提供するということが彼の目標であったこととしている。

ポール自身が書いた物語は、ロータリアンの生まれた歴史でもある。特にロータリーに於ける職業別の考案なるものは、ポールがシカゴに於いて続けた生存の爲の苦闘に対する反動であった。そしてその広い世界的な見解は、彼が多く土地に足跡を印した5年間の放浪生活から生まれた自然的な成果である。



この本の中にすばらしい言葉を発見した。「人間の向上に役立つとする運動の唯一の倫理的観念は、全部を包摂し得る観念である。ロータリーは絶ての人間の絶ての生活に資する運動であること以外に、何物であることにも満足してはならない。」東京ロータリー創立9年目の米山翁は、何かロータリアンの神髄にふれたような思いで、凡て

自分の力としたことであろう。ポールは信じていた。「自分の余生が永いにせよ短いにせよ、其れは自分が飽くまで善用せねばならない一個の信託財産である。又信する自分の精神的富裕は肉体の健在に依附し、そしてこの両者は自分の堅固な徳徳の上にある。」と。

ポールと米山から学んだ言葉を紹介したが、これは1960年以来私自身のロータリアンの精神としている。ポールは次のようにも語っている。「この世界は常に変遷する。我々は変遷する世界と共に変遷する用意がなければならない。ロータリアンの歴史は幾度も書き替えられねばならないでしょう。『社会生活に於ける人間の幸福は他人への思いやりと助け合いから生まれる。』我々は若い人達の中に将来に対する人間の唯一の希望を認めるものである。『仕事は大事だ。併し人生は仕事以上のものだとするれば、教養は技術以上のものである。』『大事をなし達げるには二つの要素が不可欠である。第一は先見の明。これなくしては有終の美はない』

一方、米山の言葉にも蘊蓄がある。「ロータリーは見えないところに仕事があり目立たないところに妙味がある。『ロータリアンの例会は人生の道場である。』『ロータリーは友連作り人作り。感動を分け合うところである。』『ロータリーは決して西一のものとして統一せず、アジアの流儀を以て之を運営すべきである。』特に「アジアの流儀を以て〜」の部分は、R1がアメリカに本部をおき活動していたことや、当時の世相などを考えると、勇気ある発言といえるだろう。

風故知新、ポールと米山翁の言葉は、今も私達の行き先を指し示しているような気がする。

記念誌編集

余話

(了)

米山梅吉記念館は、平成17年4月、35周年記念事業として、『超我の人 米山梅吉の覚書』を発刊した。このとき、4000部を印刷した。昨年12月、残部が数十部になり、いよいよ印刷の準備に入った。本年3月末には、在庫が零となっていたところ、この4月に増刷が完了することとなった。

その印刷部数であるが、1500部とした。これまでの経過からすると、その在庫が全部処分できるまでに、相当年数がかかると思われる。しかし、増刷部数が少ないと単価が上がり、現在の頒布価格である2,500円を上回ってしまうことになる。一方、1000部でも1500部でも全体の経費は、ほとんど変わらない。このため、1500部としたわけである。

増刷本は、事務局で相当な注意と時間をかけて、完全に誤植をなくした。そして、若干の補遺を付したものである。まだ購入をしていない方は、この際、購入をしていただきたい。既にをお持ちの方は、他の方には是非勧めいただきたい。

ところで、これまで7回にわたり、『編集余話』ということで、随文を書き進めてきた。今回の増刷を期に、余話としての筆をおきたい。

これまで、書くべきかどうか迷っていたことがある。最終の稿としては、いささかそぐわいな内容であるが、思い切って記してみたい。それは、初編ロータリーのことに、誤った記述が散見されることである。当初のころは、ひどく気になっていたが、だんだん気にならなくなって、最終回にいったわけである。

そのもととは、米山梅吉が日本にロータリーを導入しようとした契機についての『米山梅吉傳』の次のような記載である。

「大正六年十月十五日、米山先生は日本政府の特派財政経済委員として渡米された。この年ロータリーの大会が英国のエジンバラに開かれ、それに参加する米国会員のために、大汽船が二艘運船されたこと聞いて、先生はロータリー・クラブに注目し、三井物産会社支店長福島喜三氏に調査を依頼して帰朝された。」これは、二つの点で事実と相違している。一つは、「この年(大正6年 西暦1917年)ロー

「余話」を終わるにあたり

35周年記念誌編集委員長

井口 賢明

(沼津北RC)

タリーの大会が英国エジンバラで開かれた」という点である。

もう一つは、「米山が二艘の運船の話を聞いてロータリー・クラブに注目し、……福島喜三氏に[ロータリーのこと]の調査を依頼して帰朝された。」ということである。

①米山が1917(大正6)年10月、日本の特派財政経済委員として渡米したことはそのとおりである。しかし、この年、1917年にロータリーの大会が英国エジンバラで開かれたことではない。記録でも分かるように、スコットランドのエジンバラでロータリー世界大会が開かれたのは、世界大会としては、第12回目であり、1921年6月のことである。ちなみに、『ロータリー日本五十年史』によれば、この大会の参加者数は、2523人で、日本からの出席者はない。

一方、日本にロータリー・クラブ(東京RC)ができたのは、1920年10月で、加盟証証があったのは、1921年4月である。したがって、エジンバラの世界大会のときは、すでに日本にロータリー・クラブができていた。

それでは、エジンバラへの参加のためではなく、それより以前の大会のことではないかということも考えられる。しかし、それまでの国際大会は、全て米国内であって、海外でのそれは、エジンバラが初めてである。したがって、その以前に二隻運船ということはまずありえない。

なお、米山が1917年10月米国に行ったとき、3年半後の国際大会がエジンバラで開かれると決まっていた、既に運船の準備が始まっていた、ということは考えなくてよいであろう。

ちなみに、米山は、エジンバラの国際大会に参加のため、二艘が運船されたことを何かの折に聞いたのであろう。その話を基に、それが『傳』のような文章になったと考えられる。それでは、米山がその話を聞いたのは、どのような折であろうか。アメリカで聞いたのか、日本で聞いたのか、後者の可能性がないわけではないが、状況からすると、

米国内で聞いたと考えられる。そうすると1921年6月以降のことになるわけだが、米山がアメリカに行ったのは、その以降では、1921年10月15日からの英米訪問実業団のときである。このときは、11月10日から12月14日まで、断続的であるが、20日間ほどニューヨークに滞在した。この時の可能性が高いことになる。②米山が二艘の運船の話を聞いて、福島喜三氏にロータリーのことの調査を依頼したというのは、①のことから白々と事実と異なることになる。



大西洋客船上にて

「ダラスの船長(三井銀行常務取締役時代)とかいわれているところである。そのとき、米山と福島の間で、ロータリーの話が出たかどうかであるが、これを裏付ける確たるものがない。水を差すように申し訳ないが、多くの人が願望的なことから、ロータリーの話しが出たといっているように思う。このことは、以前触れたことがあるので、ここでは繰り返さない。

なぜこのようななら探しのようなことをするのかである。『米山梅吉傳』は、米山のことについての定本的な役割を果たしている。したがって、米山のことを書こうとする人は、多くがこれを参考にしている。このため、多方面にわたって、これが伝播することになる。その誤った内容が広まってしまうのが悔いわけである。

内田稔『無我の人 米山梅吉』(昭60.8.1)、戸崎肇『社会貢献の先駆者 米山梅吉』(芙蓉書房出版 2000.3.15)は、『傳』の免の内容がほぼ同内容で記述されている。

他にロータリー関係者の講演や文章でもこれを引用するものがいくつかあった。これについて、とくに戸崎の本について、記念館の前々理事長坂

本豊美が苦言を呈した文章を書いたことがあった(ロータリーの友「米山梅吉の事績」平12.7)。別に『傳』を非難するつもりはない。誰でも思いこみや思い違い、うっかり確認しないで書いてしまうこともある。とくに『傳』のこの部分の執筆者は、ロータリー関係者ではない。当時としては、確認に大変な作業があったことを考えれば、なおさらである。

ちなみに、極めて細かいことであるが、福島は地位である。いろいろある。①『傳』でいうように支店長というのがある。内田稔『無我の人 米山梅吉』は、支店長でもダラス支店長という。②ダラス出張所長というのもある。『福島喜三伝』がそうである(ただし、所長格という)。この執筆者は、三井物産の支店長までつとめた方である。よほど確信があったのであろう。

ところが、『三井事業史』によると三井物産には、ダラスに支店も出張所もなかった。なにかの間違ひではないかと、ずいぶん他の資料も当たった。やはり同じで、ダラスに支店や出張所があったということは確認できなかった。ただ、出張員という事務所のあった可能性はある。出張員といっても、1人だけの事務所というわけではない。出張員をキャップとして、その下に大勢のスタッフがいるわけである。出張所といっておいてもいい。いずれにしても、具体的な立場まで確認できなかった。記念誌では、念のため、ダラスでの最高責任者という表現とした。なお、ダラスには三井物産の子会社(南米物産)があったが、その社長ではなかった。

『傳』の年表が他の本にも載せられている。記念館の『超我の人 米山梅吉の覚書』もこの年表をもとに作成した。その『傳』の年表に、明らかな間違いがある。米山が「大正10年11月19日 フランクリン・ルーズベルト大統領と会見」とあることである。これについても、米山に関する文章で、フランクリン・ルーズベルト大統領と会見したというようなものを見かけることがある。1921(大10)年11月ころの米大統領は、ハーディングである。フランクリン・ルーズベルトが大統領であったのは、1933年3月から1945年4月までである。このことは『傳』の本文222頁にも見える。なお、『傳』の年表に「大正11年1月 国際ロータリー・クラブを東京に創設」とあるが、これはよくわからない。

書物を出版することは、念をつかわなければならぬことだとなつづく。できるだけ大勢の人に見てもらわなければならないと感じる。

米山家墓所の清掃奉仕

横浜鶴見北RC 雪吹周秀

横浜市鶴見区の曹洞宗大本山・総持寺に米山家のお墓があります。米山梅吉氏がご子息を亡くされた時にお建てになったもの、と聞いています。映画俳優の石原裕次郎のお墓が奥の方にある。総持寺の何箇所かの墓地の中では一等地というべきト区画の入り口。木屋の直ぐ前に15坪以上はあろうという広い敷地を御影石の1米ほどの高さの石垣で囲い、その墓地の上に縦横80程、高さ2米ほどの大きな墓石が立っているのですから、良く目立ちます。偉容と申すべきでしょう。

私共のクラブの例会場はここから直線距離にして200米ほどの近くですから、日本のロータリーの祖とも仰ぎ、敬愛する米山翁ゆかりのものと認識して、かねてから心ある者が折リ々々にお参りをしております。ただ、米山翁の遺骨は此処には無く、詳しい事情は良くわかりませんが、管理が行き届いているとは言えない状況で、植木の枝は伸び、敷地は草花々という有様は、裕次郎の墓に詣でる人など多勢の人の目に見苦しく映るのではと心を痛めておりました。

私共、横浜鶴見北RCはこの4月6日に創立35周年を迎えます。そこで、その記念行事の一環としてこの墓地の清掃奉仕をしようというこ



とになり、3月23日(日)に実施しました。16名の会員のほか、会員夫人も加わり、上天気の下、1時間ちょっとの労働に勤しみました。当日は偶々、横浜RACの方達も同様の計画を立てていたのでご一緒し、当地区の亀ヶ谷邦博ガバナーもご夫婦でお見えになって参加して下さいました。春分の日が雨だった為か、この日はお墓参りの人々が多く、大集団で清掃をやっている我々をちょっと驚いた目で見て通っていくので、お揃いの緑のジャンパーの背中に書いてあるクラブ名が見える様にわざと背を向けて、さも仕事をしている様な振りをしたのは私だけでしょうか、些かやり過ぎだったかと反省しています。

墓地の上に全員が乗り切れないほどの人数でしたから、交代で、いわば遊びながらやった様なものですが、多勢の力は凄いなもので、地面は雑草のかけらも無く掃き清められ、墓石はピカピカという仕上がりました。

終わって丁度お昼、10分ほど歩いて鶴見駅前の、当クラブ会員経営の中華料理店「翠華楼」にRACの方達を招待し、更なる交流を深めました。

とても清々しく、充実した一日でした。



「Keep Your Name Clean」(汝の名を汚すなかれ)

山田養蜂場の社員は「Keep Your Name Clean」

という言葉が刻まれた名刺入れを持っており

ます。これは、ロータリアンである弊社代表の山田英生が自身の尊敬する、わが国ロータリークラブの創立者であり、かつ、わが国の銀行の生みの親といわれる、三井信託銀行創立者の米山梅吉氏の心に響いて作成したものです。山田代表は、「すべて

の事業は世のため人のためになされるべきである」との、米山氏の考え方に非常に感銘を受け、氏が三井信託銀行の行員に対して作り配ったとされる、この「Keep Your Name Clean」の言葉の入った名刺入れを複製し、2006年度より全社員に対し、入社時に手渡しをしております。

山田は、全社員を前に、この特別な想いの込められた名刺入れについて、次のように語りました。「この真の名譽に生きる生き方というのは、わが国古来より日本人の心として世

株式会社 山田養蜂場

健康食品事業部 上原 俊 男



界中から尊敬されていた、武士道の精神に通ずるものです。世間は今、利益至上主義、経済一辺倒の風潮がありますが、個人も企業もそのような考えでは絶

対に長く続くはずがない。どうか我が社の社員は我が社の企業理念を肝に銘じ、この名刺入れの言葉に恥じない真に心ある仕事をしてもらいたい

「Keep Your Name Clean」という言葉は、我々が企業人としての誇り、また人間としての誇りを、常に忘れてはいけないことを教えてくれます。名刺入れを開く度に、自分の名刺と

「Keep Your Name Clean」の言葉を目にして、襟を正す思いで、誠実な仕事をしようという決意しております。

—100円の細い糸が館と全国を結ぶ—

全国1人年間100円募金運動

全国で展開中の運動です。事業費の不足をおぎなうために毎年度継続して行っております。何卒よろしくお願いたします。クラブ単位、地区単位でご送金いただく方が便利ですが、勿論個人でも結構です。この運動は任意のご意志によってお願いしております。

賛助会費ご協力をお願い

記念館運営及び事業費の一部にあてるため、引続き賛助会員による賛助会費の運動を続けております。会費は、お一人年3,000円(1口)です。賛助会員には記念館館報を直接お届けしております。個人でもクラブ単位でも結構です。ご入会の程お願い申し上げます。

●100円募金
●賛助会費

郵便振替口座 番号 00820-4-57730
財団法人 米山梅吉記念館

ガーデンのある美術館リゾートへようこそ。

豊かな自然に恵まれたクレマチスの丘は、まるでそこだけ時間の流れ方が変わってしまっただけのような癒しのエリア。クレマチスの花を中心に四季替々に咲く花が楽しめる広大なガーデンをはじめ、ジュリアーノ・ガーデン、ベルナール・ピュアフェットゥーの巨匠の作品も心ゆくまで鑑賞できる美術館。新鮮な魚介類で地野菜を採る方々に残った料理を堪能できるレストランなどがあそびしています。



米山梅吉記念館へお車で15分



花・美術館・食

クレマチスの丘

〒411-0931 静岡県長泉町クレマチスの丘(スルガ平)347-1
TEL (055) 989-8787 ホームページ <http://www.clematis-no-oka.co.jp>
JR三島駅より無料シャトルバス運行 水曜定休

米山梅吉記念館のご案内

開館時間

午前10時～午後5時 (但し11月～3月は
午後4時まで)

休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日
(5月・8月の特定日)



米山梅吉記念館 館報

Vol. 12

発行日 平成20年8月15日
発行者 財団法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊信助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
URL: <http://yoneyama-umekichi.jp/>
e-mail: yumh@ai.tnc.ne.jp
印刷 フタバ印刷株式会社